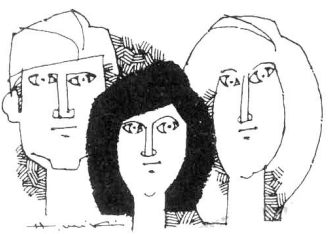
愛を積む

穂積美千子

桐原書店

愛を積む

穂積美千子著



桐原書店

著者
穂積美千子（本名鈴木美千子）
昭和十四年一月一日、福岡市中洲に生れる。三十二年西南女学院高校卒業。四十年穂積隆信と結婚、四十二年長女由香里出産。
五十八年一月、夫・娘とともに三人の名まえの頭文字で命名した「タミュ企画」を設立。子どものことで悩む親や、親との対立に苦しむ子どもの相談にあたっている。

愛を積む

一九八三年九月十五日　第一刷発行

定　価　九四〇円

著　者　穂積美千子

発行者　山崎賢二

発行所　株式会社　**桐原書店**

東京都杉並区阿佐谷南三ノ四ノ二二一（〒一六六）

電　話　〇三（三九一）五一二一（代表）

振　替　（東京）六—五五二四四

印　刷　カシヨ印刷株式会社

装丁／イラスト　幹英生

落丁本・乱丁本は小社でお取替えいたします。

0077—8707—1381

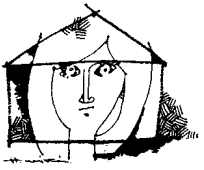
愛を積む　●もくじ

「積木」家のママとして……1
『積木くずし』台風上陸……3
体験を通して思うこと……7
由香里、その後……10
おばあちゃんのこと……23
昔ばなし……28
「タミュ企画」の窓から……30
積木おばさん奔走記……35
九州発＝小さな心の叫び……39
良子ちゃんは「ぬけ出したい」……60
旅びと・守ちゃん……77
お母さん、がんばる（その一）……85
お母さん、がんばる（その二）……91

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

祈りをこめて……101
陽子ちゃんの出発……108
たくさんの「由香里」たち……119
シンナーがいやになる日……121
自分の親は殺せない……132
淋しい思春期……147
自立するということ……164
この子らとともに……183
竹江先生のこと……185
のり越えた子どもたち……188
あとがき……211

「積木」家のママとして



『積木くずし』台風上陸

昭和五十七年九月二十五日、朝八時。

私たち夫婦は朝日放送（大阪）のテレビスタジオに入りました。五日前の二十日、主人が書いた『積木くずし』が発売され、私たちにそのことを話す機会を同局の番組「土曜の朝に」の総合司会・玉井孝さんが与えてくださったからです。

そのときはまだ『積木くずし』が発売直後だったために全国の書店に充分出回っていませんでした。番組では本の内容の紹介、書いた動機、現在の由香里の様子などをお話ししました。

番組終了後、スタジオからロビーに私たちが出てきますと、局のかたが、

「視聴者からの電話が殺到しています。なんとかしてください」

というのです。とにかく主人と手分けして、できるだけみなさんとお話ししましたが、回線が一時止まるほどの電話で、朝の九時から夕方まで朝日放送を一歩も動くことができませんでした。

それが『積木くずし』への最初の反響でした。

「このままでは収拾がつかない。来週もう一度、出演してくれますか」

玉井さんの言葉に、私たちは次の週も大阪へ行くことになったのです。

その間、朝日放送からの連絡で、視聴者のかたからの手紙が二万通になり、三万通になったことを知りました。そして私たちが再び朝日放送に行ったときには、ついにその数が五万通を越えていたのです。

（ああ、穂積が私生活を書いたことで、これだけのかたの反響を呼んだのだ。悩んでいる親や子どもたちの、なんと多いことか。私たちだけではなかった）

まず、そう思ったものです。

「土曜の朝に」には以前出演したことがありました。この番組はゲスト夫婦が結婚のときの話とか、日常の生活の話などをインタビューされる番組です。

そのお話があったとき、私たち夫婦はすでに由香里のことで問題をかかえていたのです。その問題をかかえている夫婦が、のん気な顔をして、夫婦のなれそめの話などをすることに抵抗を感じたので、主人と話し合い、率直に子どもの話をしようと決めました。テレビを通して視聴者のみなさんに私たちの悩みを聞いてもらいたいと思ったのです。

そのことを玉井さんにお話ししたところ、玉井さんも快く私たちの申し出を聞いてくれました。

そのころの由香里は、学校をさぼったり、警察に補導されたりしたことが何回もありました。

私たち夫婦は、その時点では、それからの一年半の生活が『積木くずし』のようになろうとは、夢にも思っていなかったのです。

そのときにテレビでお話したことに関しても非常に大きな反響がありました。

私たち家族のために泣いてくださるお母さん。ご自分の悩みを訴えようとするお母さん。ほとんど世間から、いわゆる「非行」と言われる子どもを持つ親御さんです。

その親御さんたちが、

「よく悩みを話してくれた」

と言ってくださいました。みなさん、世間の眼を避けて暮らしています。そんな子どもを持っているのを、恥だと思っているのです。

そのころから反響が、火がついたようにもの凄くなってきました。

「本が手に入らない」

「書店に行ったが売り切れだった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

問い合わせが出版社に殺到しました。あとで出版社のかたに聞くと、社員全員が電話にかかりっきりで、そのためにみなさん残業の毎日だったそうです。

テレビの反響の凄さを身をもって体験しました。子どもの非行のことで悩んでいるお母さんたちが、本を読む余裕などないことを私は知っています。

（そのお母さんたちがテレビを見て、書店に足を運んでくださっている）

実感として、その悩み、苦しみの深さがよくわかりました。

実は、主人が『積木くずし』を書いたり、テレビで私たちが発言したりしたことを、警視庁の竹江孝先生がどう思われたかが、私たちにとっていちばん気になることでした。

「先生、どうだったでしょうか」

電話で聞く私に、

「あなたが感じていることを、率直にお母様がたに話すことはいいことですから、自信を持ってお話ししなさい」

そうおっしゃってくださったのです。その言葉を私たちは、一種の励ましとして聞きました。

自宅の方へも電話や手紙が来るようになりました。発売二週間後ぐらいからだったと思います。そのころは毎日、電話の応待や手紙の返事に一日中かかりきりです。直接会いにみえるか

たもいらっしゃいました。

いろんなかたが訪ねてみえたのです。ですから日を追うに従って「荒れる子どもたち」というのは特別な存在ではなく、どこにでもいるのだという思いを深くしました。

主人が『積木くずし』という貧しい一冊の本を書いたことによって、今まで小さな家庭にいたひとりのだめな母親が、世間の人にも接し、いろいろなことを学んだような気がします。

そして、もうひとつ新鮮な発見だったのは、子どもたちからの電話でした。親と子が理解し合えないことによる悩みを持っている子が、非常に多いことを知りました。

また、家庭が破壊されたことによって逃げ場を失っている子どもたちがたくさんいるということも知りました。

体験を通して思うこと

『積木くずし』発売後、しだいに本の反響が広がり始め、私のところにもたくさんの相談の電話や手紙をいただきました。

そんな中で、主人は本来の役者の仕事で、芸術座に出演が決まりました。私はもっぱらみなさんの電話や手紙へのお答えに追われていたのです。

そのころは、私たちの体験をお話しすることに精いっぱいで、悩んでいるお母さんたちの電話に、どのように答えてさしあげたらいいか、まだ手さぐりの状態でした。

なにしろ、由香里と、家のまわりにいた由香里の友だちしか知らないわけですから、本当にそれぞれのお母さんと子どもが置かれている状態がわからないのです。

しかし、よくよく聞いてみると、どの子も、由香里やその友だちの親に対する態度と同じように思えました。

ごく普通の子が、親と子の関係がうまくいかないことから、シンナー、暴走族、家庭内暴力、登校拒否などに走って行くことがいかに多いか、ということに気がつきました。

子どもに対する親の在り方がどんなに大切であるか、ということを、私たち夫婦はしみじみと感じました。

どのお母さんも

「学校がこうなんです……、先生がこうなんです……、世間が……」

と言います。もちろん試験の制度だとか、偏差値とか、それもあるでしょう。でもそれはあくまで要因のひとつであって、いちばんの原因は「子離れできない親」にあるのではないでし

ょうか。そこに夫婦の問題とか家庭内のさまざまな要素がからんできます。

これは我が家もそうでした。まさしく私もそんな親のひとりだったのです。

親は自分の希望を子どもに押しつける、ということが多いようです。親が敷いたレールに子どもをのせることが、親の務めであり、子どもにとっても最良なのだと思っている場合が実に多いのです。

子どもを教育しなければ、と思うあまり、親の考えを子どもに押しつけた結果が、子どもの心を親に対して閉ざさせ、反抗的にさせることになります。その上、子どもの自立心をも、もぎとってしまうことになるのです。

私自身もそうでした。由香里の状態がひどくなり、竹江先生にそのことを指摘されても、まだわかりませんでした。

竹江先生は言葉の少ないかたです。

「自分で考えなさい」

というのが先生の姿勢です。ですから、

「由香里ちゃんには意見をいってはいけません」

ということが、具体的にちっともわからず、

「なぜ?」

という思いが最初のころは強くありました。しかし、お母さんたちの話を聞くようになってから、

(ああ、子どもに自分で考えさせ、責任をとらせなさい、自立させなさい、ということなんだ)

と客観的に考えられるようになったのです。ですから、竹江先生のおっしゃることが本当にわかったのは、『積木くずし』発売後、多くのかたとお話しするようになってからといってよいと思います。

今でも、お母さんたちのお話を聞きながら、竹江先生にいわれたことの真実が胸に響きます。

由香里、その後

『積木くずし』は、由香里が銀座のレストラン〝ゲルマニア〟に勤めたところで終っています。

「その後の由香里ちゃんはどうしていますか」

というお手紙をたくさんいただきました。

私の手もとに〝ゲルマニア〟の給料明細が五枚あります。昭和五十七年の四月に行き出して、九月の半ばまで約半年間。「鈴木由香里様」と書かれた給料明細です。由香里はお給料をいただくと全額、

「はいママ、今月分」

と渡してくれました。

八月の半ばに、由香里は〝ゲルマニア〟に行きながら、昼間はある喫茶店でアルバイトを始めました。その喫茶店で出会ったのが健ちゃんです。

健ちゃんはトラックの運転手をしている十九歳の青年です。由香里のアルバイト先の喫茶店の、いわば常連客でした。毎日トラックを店の前に止め、コーヒーを飲みます。そんな彼に由香里は恋をしたのです。

トラックの運転手は、普通のサラリーマンと違い、時間が不規則です。デイトの約束もなかなかできないうえに、約束をしても彼が来れないときもあります。そうすると、かつての彼女には考えられないことでしたが、由香里は一時間でも二時間でも待っています。そうやって待っても、健ちゃんが来なかったことがありました。

「でもさあ、運転手だから仕方がないよね。高速道路だって混んでいるかもしれないもん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com